

# 幼少時に母との死別を経験した子どもの経過に関する研究

近藤 健太\* 竹内 康二\*\*

本研究では、幼少期に母親と死別した成人男性、および子どもが幼少時に妻を亡くした父親を対象に面接を行い、この二つの事例に基づいて幼少期に母親と死別した子どもの養育に関する課題を検討することを目的とした。2歳8ヶ月で母親をなくした子どもの父親(53歳)と、5歳のときに母親と死別した経験のある男性(28歳)の二人に対し、面接者による一対一の半構造化面接を行った。面接の結果から、子どもの死別体験後の心的適応に影響する要因として、①死別直前の母親との別居期間の有無、②子どもが死別を経験した年齢、③残された親の再婚と新しい親への適応、④残された兄弟や新しい兄弟との適応が抽出された。

キーワード：親との死別、幼児期、家庭環境

死別に関する心理学的研究は Freud (1917/1970) が喪失対象との関係性などについて述べた悲嘆研究に始まる。その後 Bowlby (1980/1981) は、喪失対象に向けられていた愛着を別の対象に結びなおすことが重要であり、喪失対象への愛着の継続は心的適応を阻害するものであると述べた。しかし山本 (1997) は、死別後に喪失対象と物理的に切断されても心理的に結合することで喪失を補修し、死別を乗り越えることができると述べている。

子どもにとって、保護者との死別体験はその後の発達に大きな影響を及ぼすといわれている。死別に伴う家族関係の変化や経済的理由などによる転校・転居な

どの二次的喪失を余儀なくされることがあり、そういった精神的負担や葛藤の解消のために通常子どもも死に対してもっと知りたいと思うことや、積極的に喪失対象の話をするなどの「大人と同じニーズ」を抱えるといわれている。しかし、そういったニーズを抱えつつも子どもの悲嘆反応は通常、大人とは異なるとされている(瀬藤・黒川・石井, 2011)。そこで、子どもの主な悲観反応を「情緒・感情」「行動」「身体」の三つに分類し、Table 1 に示した(瀬藤他, 2011)。

瀬藤他 (2011) によると、大人は、死別経験後数ヶ月は非常に強い悲嘆反応を示し、時間経過とともに徐々に落ち着いていく。それに対して子どもは、成長過程

Table 1 死別を経験した子どもの悲嘆反応

情緒・感情レベルの反応				
悲しみ	不安	怒り	落ち込み	
罪悪感	後悔	絶望	感情の麻痺	
孤独	無力感	否認	恐れ	
混乱	現実感の無さ	気分の変動	不信	など
行動レベルの反応				
泣く	ぼんやりする	集中力の低下	学業不振	
落ち着きの無さ	元気の無さ	不機嫌さ	引きこもり	
はしゃぐ	神経過敏	幼い子のような振る舞い	習癖	
無口になる	反抗	大人のような振る舞い	怖い夢をみる	
無くなった人の夢を見る	大人にまわりつく			など
身体面の反応				
夜泣き	不眠、睡眠障害	食欲低下	口渇	
頭痛や腹痛	吐き気	疲れやすさ	胸の痛み	
アレルギー	夜尿、排泄障害	体のだるさ		など

(瀬藤・黒川・石井 (2011) より一部変更して引用)

\* 明星大学人文学研究科

\*\* 明星大学人文学部

の中で喪失対象の死を何度も追体験し、その都度悲嘆的感情を感じる。そのため、子どもが喪失対象の死を乗り越えるには長い年月を要することもある。

子どもによる悲嘆感情の表出方法には様々なものがある。発達年齢にそぐわない行動をとる退行現象がみられる子もいれば、過度に「大人っぽく」なる子もいる。石井・左近 (2010) はこれらの身体的、感情的反応を「子どもの SOS 反応」として三つに分類した。一つめは、「不健康児タイプ」である。このタイプは、主に頭痛・腹痛などの身体症状によって悲嘆的感情を表現し、病院などの専門機関においてもはっきりとした原因が見つけられないことが多い。不安や心配事が、身体の痛みや、体調の変化として現れていると考えられる。

二つめは、「心配無用児タイプ」である。このタイプの子どもは一見、何事もなかったかのように振る舞い、気が利く「いい子」になろうとする。そのため、「死別を乗り越えた」と受け取られがちである。しかしそれは、死別によって心に開いた「穴」を家族や友人を助けることによって必死にふさごうとしている状態とも考えられる。

三つめは、「問題児タイプ」である。このタイプの子どもは、不登校や家庭内暴力など、突然の抑えられない感情を爆発させてしまうタイプである。このタイプに分類される子どもはしばしば、口答えなどで周囲を困らせてしまうことがあるが「自分では感情がコントロールできないくらい苦しい」という反応の可能性も考えられる。以上のような反応を一度に複数表現する子どももいれば、一つの反応を繰り返す子どももいる (石井・左近, 2010)。

さらに瀬藤他 (2011) によると、死別に対する子どもの理解とその表出方法は年齢によって変化するとされている。0～2歳の子どもは、死別をそのまま理解することは難しいが、親の不安定な気持ちを身体で感じ取ることができる。この時期の子どもは、まだ適切に思いを言葉にできず、眠れない、食べられない、泣き止まないといった形で表すことがある。3～6歳の幼児期の子どもは、死別について言葉にすることはあっても事実としてきちんと理解することは難しい。また「ママはこれからずっと眠ったままなのよ」と大人に語られた時「じゃあ、いつ起きるの」と聞くなど、本やテレビで聞き知ったファンタジーと死をつなげ、現実と空想の世界の区別がつけられないことがある。さらにこの時期の子どもは遊びのなかで気持ちを表現していくことが多くなる。7～10歳の子どもは、死について

生き返らないという理解はできるようになるが「もしかしたら、自分も死ぬのではないか」等の過剰な不安を抱くことがある。これらの不安を抱くことで頭痛や腹痛を起こすことがある。11歳以降になると、知識として死を理解することはできる。しかし思春期であり、不安定な精神状態になりやすいため「どうにでもなれ」という思いが起きやすく、非行に走ることもある。

一方、大切な人との死別を経験した後の人間関係は、遺族にとって重要な課題である (倉西, 2010)。家族の精神的ショックによる心身の不調により、遺児の精神的・身体的ケアまで手が回らず、不安や疑問を抱えたまま過ごすことになってしまうケースも少なくない。家族間の関係が「ギクシャク」し、一連の心理的葛藤や感覚の変化が自己を他者から疎外する行動につながる可能性がある。そして、他者からの配慮が逆に「腫れ物にさわる」様に扱われている状態だと認識してしまい、その結果のさらなる疎外感と、死別にまつわる話の回避、両親健在家族への憧れとあきらめ等が相乗効果を生み「こんなに不幸なのは自分だけだ」と、他者からの孤立をさらに強く感じる可能性がある。

親と死別した子どもに関する海外の研究として Cerel, Fristad, Verducci, Weller, & Weller (2006) と Brewer & Sparks (2011) による報告がある。Cerel et al. (2006) は、360組の両親との死別経験を持つ子ども (6～17歳) と残された保護者を対象に、死別経験後の期間によって四つの群 (2ヶ月以内, 3～6ヶ月, 7～13ヶ月, 14～25ヶ月) に分けて面接を行い、両親の死別に追隨する悲嘆は死後2年以内に起こることを明らかにした。しかし、死別経験のある子どもたちの精神健康度を死別経験のない二つの群の子ども (適応群とうつ病群) と比較すると、親と死別した子どもは適応的に過ごしている子どもよりは精神健康度が低かったものの、うつ病と診断されている子どもたちに比べると精神健康度が高かった。これらのことから、幼少時における保護者との死別体験は、子どもの心的適応に対してネガティブな影響を及ぼすストレスナーになりえるが、病的な状態をもたらすほどではないことが多いと考えられる。しかし、片親を亡くすことに伴う収入の減少、金銭的困窮により家族間の関係にひずみが生じること、残された両親の悲嘆、また他の家族の心的不適応を経験することは、抑うつや、ほかのすべての精神病的症状を患う大きなリスクとなることが示唆された。

こうした Cerel et al. (2006) の報告から親の経済的地位の高さと、残された親の悲嘆反応レベルの低さは、子どもの心的適応に対して大きな影響を与えることが

分かる。そして子どもの心的適応には、外的な支援者の存在が大きく関わっており、支援者が外的環境要因や「支援者を支援する人」からの影響を受け、それが子どもの精神的な回復の大きな要因となると考えられる。

一方 Brewer & Sparks (2011) は、保護者との死別後に子どもの生活を支える要因を明らかにするため、死別を経験した子どもたちをサポートする施設である英国の「ロッキーセンター」に通う十三人の子どもたちに対する半構造化面接と、その後の追跡調査を行った。これらの参加者のうち四人は死別を経験してから2～4年経過しており、他の九人は10年以上前に死別を経験していた。親と死別した子どもたちとの面接の結果から、次に説明するような七つの支援のポイントが抽出された。一つめは、「感情の表現」である。参加者は Ekman(1999)が提唱した根本的情動と重なる、悲しみ、怒り、恐怖、喜びの四つの情動を抱えていた。これらの感情を表現することは、死別経験を乗り越えるにあたって重要なことであり、ロッキーセンターではこれらを言葉で述べるレパトリーを手に入れることをサポートしている。二つめは、「身体的積極性」である。体を動かすことは、子どものメンタルヘルス向上の手助けとなり、子どもが親の死を乗り越えるために役立ったとされる。三つめは、「大人との肯定的な関係」である。近年の研究では、生き残った親との関係が死別後の子どもの人生に強い役割を持つとされていた。しかし参加者の語りから、亡くなった親との肯定的な関係も死別体験を乗り越えるにあたって、深い意味を持っていることが明らかになった。四つめは「能力の範囲」である。音楽活動や絵画などの芸術活動に打ち込むなど、積極的な活動を行うことは、親との死別に対処する有用な方法であることが示唆された。五つめは「フレンドシップ/社会的支援」である。同じ経験のある他の子どもとの肯定的な関係は、死別を経験した子どもが幸福な人生を送ることの助けになると推察される。六つめは「ユーモアや楽しさを持っているか」である。楽しさを持つことやユーモアのセンス、笑うことは悲嘆への対処における重大な資源であることが明らかになった。七つめは「克服」である。死別対象との心的再結合、死別経験に対するポジティブな考え方が悲しみを乗り越えることに役立つことが明らかになった。

Cerel et al. (2006) が行った大規模な群間比較研究から、死別経験のある子どもの精神健康度について一般的な傾向が示唆されたが、このような群間比較研究で

は個々の適応状態に影響する具体的な要因や、あり得る支援の方法について得られる情報が少ない。それに対して Brewer & Sparks (2011) は丁寧な面接と追跡を行い、その結果個々の適応状態に影響する具体的な要因や、あり得る支援の方法をいくつか抽出した。しかし、Brewer & Sparks (2011) の報告は英国のものであり、宗教や文化の異なる我が国においても同様のことが言えるのかどうか検討する必要があるだろう。特に、養育の中心的な存在である母親が亡くなった時、具体的に子どもの養育環境がどのように変化し、子どもがどのような成長をするのかは、個々の家庭や親族の状況によって大きく異なると考えられる。日本における具体的事例のライフストーリーから、死別経験のある子どもが適応的な生活をおくるために必要な要因について詳しく検討することが大切であると考えられる。

## 目 的

そこで本研究では、幼少期に母親と死別した成人男性、および子どもが幼少時に妻を亡くした父親を対象に面接を行い、この二つの事例に基づいて幼少期に母親と死別した子どもの養育に関する課題を検討することを目的とした。

## 方 法

### 対象者

面接の対象者は、2歳8ヶ月で母親をなくした子どもの父親(53歳)と、5歳のときに母親と死別した経験のある男性(28歳)の二人である。前者の家族をケース1、後者の家族をケース2とする。両者に対して本研究の目的を説明し、文書により協力の同意を得た。

ケース1においては、子どもをC1、父親をF1、亡くなった母親をM1、再婚した母親をM'1、と表記することとする。

面接時のケース1の家族構成は以下の通りである。C1は22歳大学生。F1は53歳自営業で、妹(C1の叔母)が一人いる。M1は生前専業主婦であり、33歳で亡くなった。姉(C1の叔母)が一人いる。M'1は45歳、3人姉妹の末っ子。F1とは大学の同級生であり、28歳の時にF1と結婚した。C1の異母兄弟(つまり再婚後に生まれたM1の子)が二人おり、一人は14歳中学校2年生、もう一人は12歳小学校6年生であった。

ケース2においては、子ども本人をC2、父親をF2、亡くなった母親をM2、再婚した母親をM'2、M'2の連れ子を姉と表記することとする。以下に家族構

Table 2 F1への面接結果

1992年 9月	M1検査するも、ガンは発見できず。
1992年 12月	M1入院, 手術 M1退院 C1がYMCAへ通い始める。 M1別れを告げようとするがC1はふざけて聞かず。 入院と同時にC1はM1の実家へ。 M1の姉がC1の通うYMCAへ送り迎えを始める。
1993年 6月3日 (C1, 2歳8ヶ月)	M1, 33歳で亡くなる。死因: 胃ガンからの転移。 葬式 → C1にM1の顔を見せるかどうかでもめる。 → M1の姉とF1の関係が悪化。 F1の実家は長男であるC1をすぐ連れ戻せと主張。 M1の母はC1を手放したくないと主張。 ⇒ M1の姉は, C1を一定期間引き取った後, F1とC1が暮らすことを進言。 C1が, 造形教室へ通い始める。 → S先生がF1の助言役となる。 「F1が無理に連れ戻すのではなく, ソフトランディングさせたほうがよい」とF1に助言。
1995年 7月 (C1, 4歳9ヶ月)	F1が再婚 M1の親族と結婚披露宴でもめる(結婚には反対だった)。 M1がC1の幼稚園の送り迎えを始める。
1996年 3月頃 (C1, 5歳5ヶ月)	F1がC1を引き取り, F1, M1, C1がともに生活を始める(M1「C1が自分の子どもと思えるまでは, 子どもは作らない」)。 S先生のシナリオに従い, M1の姉とその子の協力によりC1をスムーズに引き取ることに成功。 F1がM1に負担をかけまいとC1に積極的に関わる(M1は疎外感)。 → F1はM1にC1の養育を任せる。 C1の赤ちゃん返りスタート。
1996年 9月 (C1, 5歳11ヶ月)	赤ちゃん返り終了。
1997年 6月頃 (C1, 6歳8ヶ月)	C1の弟を妊娠? (→ 1年3ヶ月以内にC1を自分の子どもと思うことが出来たと考えられる)
1998年 4月24日 (C1, 7歳6ヶ月)	C1の弟(一人目), 誕生。
2000年 10月3日 (C1, 10歳0ヶ月)	C1の弟(二人目), 誕生。

Table 3 C2への面接結果

1987年 (C2, 3歳)	M2, 実家で療養(C2とは暮らさず) F2の母が隣に住んでおり, 祖母がC2の世話をしていた。 幼稚園の送り迎えはF2
1988年 9月	M2, 離婚。
1989年 12月 (C2, 5歳)	M2, 34歳で亡くなる。死因: 心臓の病気。 葬式 C2, M2が寒くないようにストーブで温める。 M2の母は, C2を引き取る気なし。 基本的には, F2, 兄, C2の三人暮らし。兄の友人のたまり場になり, 劣悪な環境となる(→再婚の原因?) この期間は, F2, F2の母, F2の姉, M2の父でC2を養育。
1995年 3月 (C2, 10歳)	F2, 再婚。 C2は再婚に賛成するも, 兄は反対。姉も反対。 M2の元夫, C2の家の近くで喫茶店を経営。C2は友人に誘われるも入店を拒否。 姉, 精神的に荒れ, 窃盗, 作話等の反社会的行動を繰り返す。 兄も反抗的態度。 C2は, 再婚を歓迎してはいないが, F2が望むのであれば何も言わないという姿勢。 F2とM2は再婚後, 子どもを作らなかった。 この間家庭内がかなり「ギクシャク」しており, C2は気を使って生活していた。
2003年 3月 (C2, 18歳)	高校を卒業後, 東京の大学へ進学(→東京へ行き, 地元から離れたかった)。

成を記す。C2は28歳、東京の大学を卒業後、アルバイトをしながらお笑い芸人を目指している。F2は57歳市役所勤務の公務員。姉(C2の叔母)がいる。M2は生前専業主婦であり、34歳の時亡くなった。3人兄弟の末っ子であった。M2は57歳、F2との再婚前に離婚経験がある。F2の高校の同級生であり、M2の死後同窓会でF2と再会し、30歳のとき再婚した。C2の実兄は32歳で既婚者。C2の異母姉は28歳で性同一性障害を持っている。C2と同級であるが誕生日が数ヶ月早い。

### 手続き

F1およびC2を対象にそれぞれと個別に、個室で、面接者による一対一の半構造化面接を行った。面接時には、母親の生前および死後の家族状況や家族の心的変化について面接者が質問をした。面接者は対象者の解答を可能な限りすべて書き留めた。面接時間は両ケースとも1時間半程度であった。面接終了後は、面接により得られた情報を時系列に沿って整理した。

## 結 果

### ケース1

ケース1に関して、F1の面接から得られた情報をTable 2に示した。Table 2によると、1992年12月、M1が入院し手術を行う。入院と同時にC1はM1の実家で暮らすようになる。1993年6月3日(C1が2歳8ヶ月時)にM1が胃ガンからの転移により33歳で亡くなり、M1とF1の両家系でC1の処遇(どちらが育てるか)についてもめる。そこで、M1の姉は、C1をM1の姉が一定期間引き取った後、F1とC1が暮らすことを進言した。両家族ともこの案に合意したため、C1は叔母(M1の姉)と暮らすようになる。その後C1は友人の勧めにより、造型教室に通い始め、その教室のS先生と出会う。この後、S先生はF1の助言役となる。このときS先生の「F1がC1を無理に連れ戻すのではなく、(関係者全員の様子を見ながら)ソフトランディングさせたほうが良い」との助言を受けてF1はこれに従い、C1を無理に引き取るのをやめる。1995年7月(C1が4歳9ヶ月時)、F1がM1と再婚する。これを期にM1がC1の幼稚園の送り迎えを担当することになる。1996年3月頃(C1が5歳5ヶ月時)F1がC1を引き取り、比較的スムーズにF1、C1、M1三人での生活が始まる。しかし、この時点でC1の赤ちゃん返りが見られるようになる。1996年9月(C1が5歳11ヶ月時)にC1の赤ちゃん返りが見られなくなる。1997年(C1が6歳頃)M1がC1の弟を妊娠する。そして1998年4月24

日(C1が8歳6ヶ月時)に一人目の弟を出産している。その後は、特別な問題を起こすことなくC1は大学に進学し、本研究実施時には大学4年次として順調に単位を取得して大学院への進学が決まっていた。

### ケース2

ケース2に関して、C2の面接から得られた情報をTable 3に示した。Table 3によると、1987年(C2が3歳時)M2が実家で療養をはじめ、C2の世話をF2と祖母(F2の母)で始める(幼稚園の送り迎えはF2)。1989年12月(C2が5歳時)にM2が心臓の病気により34歳で亡くなる。この時M2の母はC2を引き取る気はなかった。この時点から基本的にはF2、兄、C2の三人暮らしが始まる。C2の養育者としては、F2、F2の母、F2の姉、M2の父が挙げられる。その間のC2の家は、兄の友人のたまり場になり劣悪な家庭環境であった。1995年3月(C2が10歳時)F2が再婚する。C2は再婚に賛成するが、兄、姉は反対する。再婚後、姉は精神的に荒れ、窃盗、作話等の反社会的行動を繰り返す。兄も同様に反抗的態度をとる。これらの要因から、家庭内の関係が「ギクシャク」しており、C2は周囲に気を使って生活していた。F2とM2は再婚後、子どもを作らなかった。2003年3月(C2が18歳時)にC2は高校を卒業。家庭や地元から離れて生活したかったために東京の大学へ進学。本研究実施時にはフリーターながら自立して生活していた。

## 考 察

本研究では、幼少期に母親と死別した子どもの養育に関する課題を具体的事例に基づいて検討するために、成長した子ども本人と、残された保護者に対する半構造化面接を行い、子どもの養育環境の変化を時系列に沿って整理した。この結果を踏まえ、それぞれのケースにおいて母親の死後に子どもの養育を支える要因について考察した。

ケース1においては、C1が2歳8ヶ月時点でM1と死別したにも関わらず、約半年間の赤ちゃん返りを除いては、大きな問題なくC1は成長したと考えられる。つまり、比較的順調にM1の死別に対応したケースと考えられる。

両親の死別後の家族・他者との関係性はその後の子どもの心的適応に大きな意味を持っていると考えられる(倉西, 2010)。Bowlby (1980/1981)は死別を経験した子どもが、成人同様に喪失対象とは別の愛着対象を見つけることの重要性を説いている。ケース1においてはF1の再婚が早く、M1との死別から2年7ヶ月後

にはM'1との生活が始まったことは、C1の死別への心的適応に際して大きな意味を持っていたと考えられる。Sanders (1992/2000) や若林 (1994) は、死別により家族の一人が喪われることで家族関係のバランスが崩れてしまうことを示している。しかしケース1においては、再婚後M'1が適切にC1の養育環境を整えたこと、さらにはF1が、死別直前からC1がともに暮らしていたM1の両親、およびM1の姉の下からC1を強引に連れ戻さなかったことで、C1の養育環境が大きく変化しなかったことなどから、C1が母親の死別に対して比較的適応的に生活できたのだと考えられる。さらに、瀬藤他 (2011) によると、死別を経験した子どもの支援に際しては、積極的な介入を行うよりも子どもの気持ちを引き出すように積極的な受身の姿勢でいることに配慮した上で、共感的に子どものそばにすることが重要であるとされている。ケース1において、助言役であるS先生の助言に従い、F1が無理にC1を引き取らなかったことや、M1の姉などが生活の移行をスムーズに行える様協力したこともC1が適応的に生活するにあたって重要なことであったと考えられる。

ケース2において、C2自身は大きな問題を起こすことなく育ったが、兄と姉には不適切な行動が多く見られ「ギクシャク」した家族関係が生じ、C2は家族と距離を置くために東京の大学へ進学した。その後、フリーターではあるが自立して生活をしている。

若林 (1994) は、片方の親が亡くなった後にもう片方の親が、自身の心的負担のために残された子どもにエネルギーを向けることができなくなり、遺児にとっては結果的に両親を失うことにもつながると述べている。しかしケース2においては、F2の母を中心とした親戚のサポートで、ある程度適切な養育環境が維持された上、ケース1と同様にM2との死別後も生活環境に大きな変化がなかった。さらにBowlby (1980/1981) によると、喪失対象に向けられていた愛着を別の対象に結びなおすことが重要であり、喪失対象への愛着の継続は心的適応を阻害するものであるとされる。C2がM2と同居していたのは3歳以前であったため、M2との思い出が少なく、喪失対象としての役割が小さかった。これらの出来事が、C2がある程度適応的に生活できた要因であると考えられる。

死別に関連した特殊な精神的障害は、複雑性悲嘆 (Complicated Grief) と呼ばれる (以下CGと略)。瀬藤・丸山 (2010) によると、一般的にCGと正常悲嘆に明確な差はないとされているが、CG特有の特徴として、①

死別後6ヶ月以上の時間が経過しても非常に強い悲嘆反応を示す、②故人への強い思慕やとらわれなどの感情が極度に激しい、③以上のことにより日常生活に支障をきたしている、ということが挙げられる。M2との死別後5年4ヶ月たってもM2の死別を引きずり再婚に反対した兄は、このCGの特徴を示していた可能性が考えられる。さらに瀬藤他 (2011) によると、11歳以降の子どもは、親との死別に対して知識として死を理解することはできるが、思春期であり、不安定な精神状態になりやすいため「どうにでもなれ」という思いが起きやすく、非行に走ることもあるとされる。これらのことから兄は精神的に荒れ、非行を繰り返したと考えられる。さらに、親の離婚を経験した姉も思春期であったため非行に走り、F2の再婚後「ギクシャク」した家庭環境を形成した。このことはC2が地元を離れて進学する理由になったと考えられる。

両ケースの共通点として、C1C2ともに母親が亡くなる直前から子どもと母親が別居をしていたため死別直後に養育環境が大きく変化しなかったことや、子どもが母親との死別を経験した年齢がC1C2ともに5歳以下と低かったことが挙げられる。これらのことが目立った不適応を示さずに成人期を迎えることができた要因である可能性もあるだろう。ケース2におけるC2の兄(C2の4歳年上)がそうであったように、ある程度成長した段階で死別を経験すると(C2の兄は9歳時に母と死別)、その体験を受け入れ、適応することが困難になると考えられる。

死別体験への適応やその後の養育について特に大切だと考えられるのが、残された親の再婚と新しい母親への適応である。ケース1においては、新しい母親への適応を比較的うまく行うことができた例であると考えられる。この新しい母親との適応において、兄弟との関係も深く関わっており、ケース2のように兄や姉が精神的に荒れてしまうと、家庭環境の悪化にもつながり、適切な適応を行うことが困難になると考えられる。

以上のことから、子どもの死別体験後の心的適応に影響する要因として、①死別直前の母親との別居期間の有無、②子どもが死別を経験した年齢、③残された親の再婚と新しい親への適応、④残された兄弟、新しい兄弟との適応、が本研究の結果から抽出された。

今後は、上記四点の一般性を確認するための追試や、死別に起因する心的不適応に対する具体的な支援方法を検討することが期待される。

## 引用文献

- Brewer, J. D., Sparks, A. C., (2011). Young people living with parental bereavement insights from an ethnographic study of UK childhood bereavement service. *Social Science & Medicine*, **72**(2), 283-290.
- Cerel, J., Fristad, M. A., Verducci, J., Weller, R. A., & Weller, E. B., (2006). Childhood Bereavement Psychopathology in the 2 Years Postparental Death. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, **45**(6), 681-690.
- 石井千賀子・左近リベカ (2010). 子どもの悲観とその対応—積極的な受身の姿勢で寄り添う— 緩和ケア, **20**(4), 343-347.
- 倉西 宏 (2010). 親との死別が引き起こす家族, 他者, 喪失対象との関係の変化・遺児が抱える孤独感と喪失対象との再結合を中心に, **28**(5), 619-630.
- 瀬藤乃理子・黒川雅代子・石井千賀子 (2011). 死別を経験した子どもたちへの援助—悲観の複雑化を防ぐために— 腫瘍内科, **8**(1), 51-56.
- 瀬藤乃理子・丸山総一郎 (2010). 複雑性悲観の理解と早期援助 緩和ケア, **20**(4), 338-342.

*A study of process after parental bereavement in childhood*

KENTA KONDO (GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY) AND KOJI TAKEUCHI (DEPARTMENT OF PSYCHOLOGY, SCHOOL OF HUMANITIES, MEISEI UNIVERSITY) MEISEI UNIVERSITY ANNUAL REPORT ON PSYCHOLOGICAL RESEARCH, 2014, 32, 31-37

Key Words : Parental Bereavement, Childhood, Domestic Environment